

質疑応答

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（国立民族学博物館 外来研究員）

Q 1

今や考古学者もパブリックとの関係を考えなければならない。その際、現地の人たちが遺跡についてどう思っているのかも重要な点であるが、それについてはどのように考えるのか。

A 1

考古学者のみならず現地の人々の遺跡に対する様々な意見は重要である。ただその意見の概念や、遺跡という概念の問題まで含めて考えなければならない。

Q 2

遺跡と現在住んでいる人たちとは無関係であると考えている人が多いペルーという国において、遺跡の発掘を行い、一般公開をする習慣はあるのか。

A 2

一般公開の例は半分ほどあり、少しずつ進んでいるが制度的にはない。

Q 3

将来的に比較する地として、ペルーの北海岸や高地を考えているのか。あるいはアメリカのメキシコやグアテマラなどの古代文明の栄えた所、または日本、エジプト、ヨーロッパ等を考えているか。

A 3

ペルーではヘリテージなどの文化遺産という概念を現地の人たちが持っているのを見るほか、外からコンテキストが同じ状態でも同じことがあるのかどうか確認したい。

Q 4

遺跡の活用に関し、教育と観光という視点から研究を行っているという趣旨であったと思うが、この場合、教育と観光どちらに重点を置くのか、あるいは双方並立的に重点が置かれるのか。

A 4

現状は現地のコンテキストや文化を見ずに、遺跡というモノとして見て、それを観光客に提示するという観光よりとなっているが、発表者は議論として新しい概念を構築できる教育を中心としたい。

Q 5

日本には文化財保護法があり、それに従って行う遺跡保護や開発調査が9割以上である。ペルーの発掘調査は、開発に伴う事前調査と観光資源として遺跡を活かしていくための調査、どちらが多いのか。

A 5

ペルーでは20年前までは研究調査のみであったが、この10年で経済が良くなったことに伴い、開発調査が多くなった。またこの5年以内に観光に向いているかの調査も再始動した。これらにはペルー政府が新制度を作り、直接資金を出している。

Q 6

開発調査に対して全額ペルー政府が調査費を出しているのか。

A 6

開発の場合はほぼ開発者側が資金を出している。

Q 7

ペルーの考古学調査に入っている日本人は、一般住民を巻き込んだ形で保存活用を一緒に考えて行う最初のスタンスで多く調査を行っているが、ほかのペルー人やアメリカ人の発掘調査及び学術調査は、本日提示されたスタンスのどちらが強いのか。

A 7

ペルー人考古学者は教育という意識もあるが、もう一点のパブリック・リレーションというところでは、一般の人にアピールして指揮をもらい研究を行うスタンスをとっている。また、人間ではなくモノ重視の姿勢も強い。一方アメリカ人考古学者は、中間に位置すると考えられる。